

I テーマ設定の理由

—まず初めにおことわり。森林太郎というのは何を隠そう、森鷗外の本名である。しかし、文壇で活躍した名として「鷗外」のほうがよく知られていると思うので、本文ではそちらの名を使うことにする。—昨年、一昨年と鷗外の初期作品を中心に研究してきたが、彼の作品の半分ほどを占めている歴史小説及び史伝小説ぬきでは鷗外作品を語れないと思う。そこで、まとめの意味も兼ねて鷗外研究をテーマにとり上げた。

II 研究方法

- (1) 作品を読み、それに関する評論などを踏まえた上で、自分の意見を述べる。
- (2) 作品の舞台となった地や、生地を訪れる。

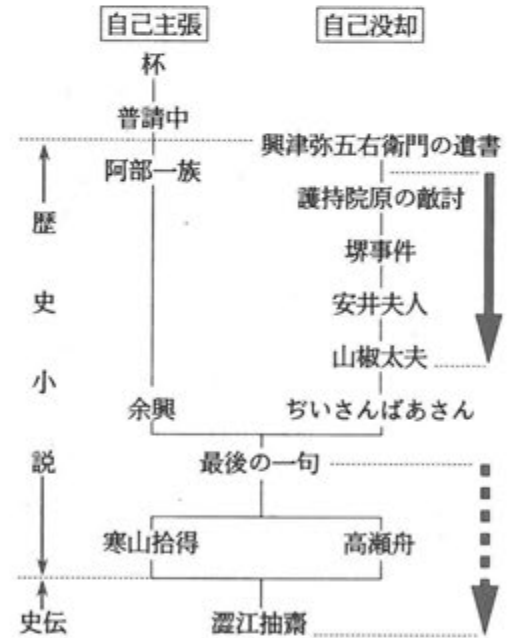
III 研究内容

1 森鷗外について

森鷗外は文久2（1862）年に、石見国津和野に生まれた。幼少から漢文やドイツ語を学び、わずか12歳にして東京医学学校予科、のちの東京大学医学部に入学。陸軍軍医として活躍し、1884年ドイツへ留学。帰国後、『舞姫』をもって文壇にデビューする。明治天皇崩御に際して乃木大将夫妻が殉死したのを契機に、『興津弥五右衛門の遺書』から始まる歴史小説へと方向を転換した。晩年には、『澀江抽齋』『伊澤蘭軒』に代表される史伝小説を書いた。1922年死去、享年61歳。

陸軍軍医総監なども務め、医学博士かつ文学博士の称号を持ち、劇作、翻訳、評論……と多彩な分野で活躍した。

同時代を生きた作家に夏目漱石がいる。漱石自身は、乃木大将殉死を契機に『こころ』を書いたという。かの時代に於いて自身の文体を貫き通した明治の2大文豪として、鷗外は漱石を意識していたようだ。



ただし、歴史其儘・歴史離れは微妙な揺れがあり、分類が不明確。

▲図1 作品の流れ

## 2 中期の短編小説

ドイツみやげ3部作といわれる『舞姫』『うたかたの記』『文づかひ』のあたりを初期作品とすると、中期作品は『杯』あたりの短編小説となろう。この時期の作品はあまり知られていないのではあるが。

### 〈杯〉

7人の少女が「自然」と銘のある銀の杯で泉の水を飲む。そこに第8の少女が来て、粗末な杯で水を汲む。7人が自分たちの杯を貸そうとすると、娘は沈んだ、しかし鋭い声で「わたくしはわたくしの杯で戴きます」と答える。自然主義に対する鷗外の態度が寓されている。

#### (1) 主題

ここに描かれている第8の娘は鷗外自身であり、また、7人の娘というのは、抱月、天溪、獨歩、藤村、花袋、秋聲、白鳥であるといわれている。この7人はいずれも、鷗外が当時意識せずにはいられなかった、文壇の第一線の人々であり、かつ自然主義者達であった。すなわち、彼はこの作品で、自然主義に対する立場を明らかにしたといえる。

『予が立場』では、花袋、藤村、白鳥らに対して「私の考えでは私は私で、自分の気に入ったことを勝手にしてゐるのです」という記述が見られる。負け惜しみなのか本心なのか定かではないが、比喩を用いていけばまさしく「私の杯は大きくはございません。それでも私は私の杯で戴きます。」というところだ。

「自分の杯で泉の水を飲む」それは諦めの中での積極的な一面でもあろう。しかしそこには、諦めの寂しさがある。鷗外の心境であろうか。

#### (2) 文体

温泉宿から鼓が滝へ登って行く途中に、清冽な泉が湧き出でる。

水は井桁の上に凸面をなして、盛り上げたやうになつて、余つたのは四方へ流れ落ちるのである。

青い美しい苔が井桁の外を掩うてゐる。

夏の朝である。

泉を繞る木々の梢には、今まで立ち籠めていた霧が、まだちぎれちぎれになつて残っている。

『杯』の書き出しである。1文ごとに改行されており、テンポの速い散文詩風のスタイルになっていて、それまでの作品と趣を異にしている。

これは、若きウィーン一派の中で特異な位置を占める詩人アルテンベルグの、諷刺と諧謔と少々粋な風俗描写とに鷗外が強い印象を受け、共感をせまられたことから出た結果といえる、と小堀桂一郎氏は述べている。

確かに、『杯』を書いてから1週間後にアルテンベルグの『釣』を翻訳している。時間的に少々矛盾はあるが、この時期に鷗外がアルテンベルグの作品に深い興味を示したと見ることは可能だろう。

### 〈普請中〉

渡辺参事官は、ドイツの歌姫に会いに銀座の精養軒ホテルに行く。着いてみると建物は普請最中である。歌姫がやって来た。しかし男は、普請中の日本の官吏であるがゆえに冷たい態度をとる。コジンスキイと一緒に来た歌姫は、それが悔しい。

近代化へと普請中の日本の一翼をになう官吏が様々な矛盾に耐えて己の意志を貫いてゆく有様が、なにげないエピソードのかたちでみごとに描き出されている。

#### (1) 短篇小説の最高峰

『普請中』を鷗外の短篇小説中最もすぐれたものとして高く評価したのは、三島由紀夫氏である。氏は、「鷗外の短篇研究」に於いてその理由を述べている。

ひとつには、渡辺参事官の氷のような心に同感措くあたわぬものがあるから。ふたつめには、今日このごろも、ビルの新築を行っているのを見るにつけ、この短篇の主題「日本はまだ普請中だ」が古びないで生きていると思うから。そして最後には、渡辺が深い諦観に浸りながらも、彼がなおその普請に参加しているからである、と。

#### (2) 「ここは日本だ」

作品中にはこのセリフが何度も出てくる。そしてまた主題ともなっている。

作品では、渡辺が平気であるのに対して、女の側ばかりが未練げに描かれている。鷗外は渡辺の面を通して、自己の官僚かつ家長としての男性的役割を設定し、意識的な存在としてあらわれようとしている。

それでいて、役所引けのひとつときの遊行のかたちをとっているのが、渡辺の鋭い反応を覗かせてはいるが、あくまでそれは「見る側」の鋭さにとどまり、「行為する人」としてはあらわれない。行為から疎外された「見る立場」に厳しく自分を固定して、「ここは日本だ」という枠中にとどまって平気である。

しかし、鷗外がこのような人物を設定して「ここは日本だ」という表現に力を入れ、平気で女と別れていくようなストーリーを考えて描きだしていったのは、それを妨害し批判するような要素が鷗外の心の中にあつたためだろう。

やはり鷗外は、「ここは日本だ」によってフィリステルになりすましていたのであつた。

## 3 後期の歴史小説及び史伝小説

鷗外の歴史小説には、歴史其儘と歴史離れという2つのスタイルがある。史実を研究し、その「自然」を尊重するという歴史其儘をおしすすめていくうちに、「知らず識らず歴史に縛られ、この縛の下に喘ぎ苦しんだ」ため、歴史離れのスタイルをとつたのだと鷗外は記している。

### 〈堺事件〉

明治元年9月、堺の警備にあつてた土佐藩兵が、フランス海兵の不法上陸を阻止しようとして銃撃を加えた廉で、フランス公使の要求により20人が死刑を命ぜられた。隊長以下20人は皇国のために切腹するのであるが、立ち会ひの公使がその

凄絶さに絶えられず中止となって、残り9名は減刑となった。この事件の顛末をとらえ、転換期の犠牲者の姿を叙した。

#### (1) 原拠との比較

鷗外は、『堺事件』を書くにあたって『泉州堺土藩士 烈挙実紀』（佐々木甲象著）のみを史料にした。

しかし『烈挙実紀』は、11士の挙が「殉国の烈挙」であることを明らかにして余栄を願おうとする感情から出たものであるため、いきおい記実以上にわたるものがからまっている。これは人情の自然ではあるが歴史の自然ではない。

そこで彼は、このような部分を排除し、新たに作品として構成した。（鷗外は好んで作品や学説の梗概を書いたため、世間はこれを梗概博士と称して揶揄した。）

#### (2) 作者の主観

しかし鷗外は、排除したものに代わる自己の主張を入れてもいない。『堺事件』は、終始歴史の自然を具象化するだけで、自己の主観を直接生の言葉で表現しようとしな

ところが、唯一、彼の主観が見えてしまったところがある。

攘夷はまだ此男の本領であった。

これはまさしく批評である。鷗外の攘夷観を暗示する言葉である。『津下四郎左衛門』からも推定して、彼は「尊皇開国」を認めていたのではない。

鷗外の進歩性は、尊皇攘夷を認めるわけにはいかない。尊皇開国でなければならない。この立場から、「皇国のために死ぬる」日本男子（武士）の死を美しいものとして描いている。

しかしこの立場から見ると、箕浦以下の死は賞讃すべき高貴なものでありながら、また気の毒な犠牲でもある。けれども、しょせんこれも、日本が近代国家に展開しようとする変動期における時代錯誤を含んだ行動なのだ。彼は、この変動期における犠牲を描こうとしたのである。切腹の場面での箕浦のセリフ「我今死すとも七たび生を更へと汝等が肉を喰はずして止まんや」は、決意と皇国精神の深さだが、尊皇開国の立場から見れば歪のある深さだ。鷗外はそれを見通しているから強く表現したくない。ただ「フランス人共聴け。己は汝等のためには死なぬ。皇国のために死ぬる。日本男子の切腹をよく見て置け」と書いた所以だろう。



▲写真1 東京本郷にある図書館

#### 〈澠江抽斎〉

『武鑑』収集にからんで邂逅した弘前・津軽家の侍医で考証学者、澠江道純の伝記を克明に記述し、その死後裔孫にも筆が及んでいる。史料を抽斎の嗣子保から仰ぎ、抽斎ならびに妻五百の姿に理想的人間像を見ながら、人間群像を見事に浮き彫りにしている。

内発的に対象に傾倒していく鷗外正系の伝記文学が誕生する。



▲写真2 島根県津和野にある鷗外旧居

#### (1) 抽斎没後

『澠江抽斎』の構成を、西尾実氏は次のように要約した。

- |                       |           |      |
|-----------------------|-----------|------|
| 1. 敬慕と親愛から生まれた抽斎探究の進展 | その1~9     | (9)  |
| 2. 抽斎の出自と環境           | その10~24   | (15) |
| 3. 抽斎の生涯と業績および人間      | その25~64   | (40) |
| 4. 抽斎没後の遺族            | その65~107  | (43) |
| 5. 抽斎の妻五百没後の遺族        | その108~119 | (12) |

この小説は抽斎死後、その妻や子供たちの生活まで言及して幕末から明治、大正に及んでおり、かえって澠江家の人々の運命の展開が明らかになっている。抽斎1人の生涯で終わっていたら、この作品は史伝としては成り立ったかも知れないが、小説としての要素は充分ではなかったのではなかろうか。死後が詳しく述べられているため、史伝小説として成立したのだろう。

しかも抽斎没後は、明治維新をはさんだ複雑化された時世に対応して、人間関係と生活も複雑化しているが、これに対しても鷗外の筆さばきは鮮やかだ。

このような見事な結果が生み出されるようになったのは、ジェネアロジックな方法の可能性に対する信頼による、伝記の新しいスタイルへの発想であった。鷗外はこう考えた。「前代の父祖の事蹟に、早く既に其子孫の事蹟を織り交ぜているのを見、其糸を断つことをなさずして、組織の全体を保存せむと欲し、叙事を断続して同世の状態に及ぶのである。」

としても、のちに「此等の伝記を書くことが有用であるか無用であるかを論ずることを好まない、ただ書きたくて書いた」（『観潮楼閑話』）と語るほどまで書きつづけたのは、抽斎の遺族、後裔に対しての並ならぬ親愛感のためだろう。

そもそも何故鷗外が抽斎に興味を抱いたのかというと、それは、歴史小説を書くために武鑑（江戸時代、諸大名の氏名・系譜・居城・官位・知行高・家紋や臣下の氏名などを記した書物）を集め始めたことから抽斎の名を知り、抽斎が官吏



で医者で学芸好きという経歴が自分と同じなのを発見して驚いた。そして、彼に敬慕と親愛の情を抱き、抽斎こそ我が理想像と思ったことに始まる。

(2) 抽斎の妻、五百（いお）

五百は、泥棒を撃退するほど気丈な女性であるが、それとともに、人がその手柄をほめるごとに恥ずかしそうに席からいなくなってしまうという奥ゆかしい、つつまやかな女性でもある。

鷗外は好んで五百のような、うちに烈しい意志をたくわえている女性を描いた。ここに安井夫人、佐代とはまた別の才女の典型がいたのである。『澀江抽斎』がジェネアロジックな方向をとらねばならなかった最も有力なモチーフは、五百の発見の中におのずと内在していたのであろう。これが“抽斎没後”の追求のエネルギー源や核になって、その複雑な人間関係を飽きることなく丁寧にあとづけさせたのであろう。

#### IV 結論

3年間かけて、1人の作家について徹底的に研究してきたわけだが、どんなに短い小説であっても筆者の心というものがこめられているように今、思う。時が経つに従って世の中も変わり、筆者の主張や見方も変わる。作品のタイプも勿論変わってゆく。そんな主張を今に伝えられる。文章とは素晴らしい手段だと思ふ。

#### V 総括

今現代において、森鷗外の評判はどうだろう。明治の2大文豪といえば、漱石ファンのほうが多いだろう、偏見かも知れないが。彼が軍医でもあったということを知っている人も少ないかも知れない。

でも、少なくとも私自身にとっては、鷗外の存在は意味を持つものだ。何気なく選んだテーマだけれど、これだけ執着しているにはその理由があるだろう——そう考えてみると思い当たった、2年生の時に読んだ『舞姫』で太田豊太郎に共感を覚えたことに。彼こそ鷗外の分身ではないか。

そして、鷗外に対する畏敬の念を更に強くした。

#### ・参考文献

- ・森 鷗外（1978） 鷗外選集第2巻 旺文社 「杯」「普請中」
- ・森 鷗外（1980） 鷗外選集第16巻 旺文社 「釣」
- ・森 鷗外（1979） 鷗外選集第5巻 旺文社 「堺事件」
- ・森 鷗外（1979） 鷗外選集第6巻 旺文社 「澀江抽斎」
  
- ・初見 靖一（1941） 「鷗外の『杯』の餘白に」 冬夏より
- ・竹盛 天雄 「鷗外 その紋様・その2『普請中』の問題」  
国文学 第24巻6号 学燈社より
- ・稲垣 達郎（1989） 森鷗外の歴史小説 岩波書店
- ・竹盛 天雄編（1989） 森鷗外必携 学燈社